

那須田務 ● Tsumomu Nasuda

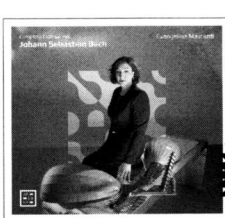
推薦

エヴァンジェリーナ・マスカルディは1977年ブエノス・アイレス生まれのリユート奏者。故郷でギターを学んだ後に、スイスのバーゼルで名手スミスにリユートを師事した。欧州のメジャーな古楽アンサンブルで通奏低音奏者として活動する他、ソリストとしてもディスクが多い。これはそのマスカルディによるパツハのリユート作品全集。パツハの周辺にいたリユート製作家J・C・ホフマンの3台の複製楽器（いずれもマテウス作。2台の13コースと14コース）を弾いているが、曲による詳細は不明。リユートは指腹で爪で弾くかで音色が変わるが、たとえばチェロ組曲第5番の編曲である組曲ト短調BWV995等を聴くとマスカルディの音は非常にまろやかで前者を思わせ、楽器の内部の豊かな響きを引き出している。各舞曲の特徴も的確に捉えられ、クラーントのリズムの愉悅が楽しく、サラバンドは静かに涙の滴るようなパッセージが美しい。

《前奏曲、フーガとアレグロ》BWV998ほどの楽章も丁寧で流麗。粒立ちが揃っているのは前奏曲BWV999も同様。パツハの若い頃の組曲ト短調BWV996は通常のリユートでは至難と言われ、調弦を変えるか移調されるが、ここでは要へ短調で弾いている。同様にヴァイオリンのバルティータ第3番の編曲である組曲ト短調BWV1006aはへ長調で弾く。他の曲と楽器が明らかに異なり、サウンドがさらに豊かに柔らかなる。その他、組曲BWV997等聴きどころ多し。

石田善之 ● Yoshiyuki Ishida

【録音評】ディスク2枚に全7曲、3つの楽器を弾き分けている。1曲のみ取分け場が異なるが、いずれも録れもどよい距離感で統一されていて違和感はない。こまやかな美しさを十分に味わうことができ、やや長めのくせがない。響が効果を発揮している。2020年2月、6月と2021年1月、5月、9月、いずれもイタリアで録音されている。(92~93)



THE RECORD GEIJUTSU 特選盤

■ J.S.パツハ／リユートのための作品全集

【全7曲】
 (詳細は巻末新譜一覧表参照)
 エヴァンジェリーナ・マスカルディ (lute)
 【アルカナ@NYCX10290 (2枚組)】 ¥4950

濱田三彦 ● Mitsuhiro Hamada

推薦

エヴァンジェリーナ・マスカルディ、多くの人が初めて聞く名前かもしれない。1977年、アルゼンチンはブエノス・アイレスの生まれ。通奏低音部を受け持ってエスペリオンXXI、アンサンブル415ほか名の知られる合奏団に「縁の下の力持ち」として活躍してきた人である。近年になって独奏者としての活動も目立つ彼女はアルゼンチン生まれとあればエバンヘリーナと呼ぶべきか。しかしそんなことは置いて一流のリユート奏者として認められるべき存在であろうことは当CDを耳にしてもわかることだ。パツハが「リユート独奏のために」として書いたと伝わる計7曲がここに聴ける。録音は2020年2月から2021年9月までかかっているが使われたバロック・リユートも3本というのが、さまざまな研究と試行が重ねられたことを物語っている。当CDの曲順も録音順というわけではない。しかしいずれも流麗なもので資料としての価値のみならず十二分に鑑賞にたいする内容だ。パツハはリユート奏者にとってもっとも重要な演奏譜(タブラチュア)を書き残してくれなかったが、再現する努力と研究心こそがこんにちのリユート奏者たちの腕にかかっている。ここにまたひとつ立派な成果が示されたことを喜びたい。同じく1006aがへ長調からへ長調に移されているのは他にも例はあった。解説はなかなか説得力があり一読の要ありとする。